

社会文化科学研究科長挨拶

大学院入学おめでとう。

私は、平成7年（1995年）4月に千葉大学に新設されました博士課程の大学院、社会文化科学研究科の科長岩田昌征です。略して、社文研と称されますが、社文研は、文学部、法経学部を母体に、教育学部や園芸学部の優秀な研究者の協力を得て、活動を始めております。

社文研の紹介の場所ではありませんから、社文研のことはこの位にしまして、博士コース大学院全般について基礎的な情報をお伝えしたいと思います。

平成8年5月1日現在で全国576大学のうち、博士課程の大学院を持つ大学は、293大学。国立大学98のうち75大学であります。博士課程の在学者数は4万8448人ですが、国立は3万4267人です。この点で、私学に比して国立大学の重みは大きいのです。

ところで、平成8年（1996年の）博士課程在学者が全国で4万8488人と言う数は、現代社会の知的活動に相応しているのでしょうか。過大なのか、過小なのか。それを考える前に、この数字の時系列を追ってみましょう。昭和35年（1960年）—7429、昭和40年—1万1682、昭和45年—1万3243、昭和50年—1万4904、昭和55年—1万8211、昭和60年—2万1541、平成2年（1990年）—2万8354、平成七年—4万3774。

欧米諸国とは制度も異なり、直接比較できる博士課程のみに関するデータの手持ちがないので、前大学院学生数を人口1000人あたりで見た数値を見てみますと、アメリカ（1992年）—7.7人、イギリス（1992年）—3.8人、フランス（1993年）—3.6人、日本（平成6年=1994年）—1.1人。

戦後日本の高度富裕化プロセスで電子機器・電子機具に象徴される知識集約的製品のウナギ昇りの生産増大や英米独仏の現代思想作品のウナギ昇りの翻訳出版の増大を考えますと、知識生産者、科学技術の創造者、新思想の開拓者が生まれ、育ち、うごめき、うめく場、母集団としての博士課程在学者が日本で増えて来た速度、また人口に占める割合、共に過小と言っ

て良いでしょう。新知識と新思想の領域におけるサツマの守タダノリと言えるでしょう。人類社会の安全と平和に対する軍事的貢献が不足しているとタダノリが批判され非難されますが、この面では日本国民の覚悟を定めた平和主義を主張すると言う弁明、あるいは反撃、逆攻勢が可能でもありましょう。しかしながら、新知識と新思想の領域におけるタダノリは、今となれば、怠惰の証しにしかすぎません。

こう言いますと、結論は、明白です。その怠惰を打破する者こそ諸君であり、その怠惰を自己否定する者こそ私達であります。そういう次第で昭和時代末から平成時代初頭にかけて大学院の改革・発展・整備・充実が叫ばれ、徐々にではありますが、実現されつつあります。

長い間、我国の高等教育の重点は、学部教育にあり、それは、ある意味で初等・中等教育の延長でありました。

高校までは、社会全体が責任を持って過去の知的・理念的蓄積総体の中から選別した知的・思想的成果を新しい世代に伝える、と言うところに教育の主旨があります。民族と人類の「共通の基礎知識」と「共通の記憶」が親の世代から子の世代へ、先輩＝先生から後輩＝後生へ伝えられます。ここに教科書の重要性があり、たとえば、「従軍慰安婦問題を教科書にのせるべきか否か」で親の世代は、深刻に論争し合うのです。

学部教育は、教授、助教授、講師の各研究者個人が教育者として自己の責任で、自分の研究経験や諸外国の最高水準を学ぶ経験に基づいて、専門領域の過去から現在に至る知的・思想的蓄積の中から主体的に選別した専門知を後生に伝えるものであります。教科書は基本的参考文献にすぎません。研究者一人一人が異なるメニューを提供するのでありますから、学生諸君は、諸メニューの選択において主体性を発揮することが期待されています。

大学院教育は、各先輩研究者がより高度な知識を教授するだけでなく、院生と共に学び、共に研究し、討論し合うプロセスで、院生の一人一人が一つの知的発見、思想的発見、個性ある独創性獲得にたどりつく道程において、手助けする所であります。このような道程のある程度形を成した成果に対して博士の学位が与えられます。これが大学院教育の目的としての

大学院審議会報告（平成8年10月）に言う「学術研究の高度化と優れた研究者養成機能の強化」であります。近年「実社会で身につけた実務的な知識・経験を学問の理論として再構成し、総合的な判断力、新しい視点、将来への洞察力を養うことを希望する人々」、つまり社会人のリフレッシュ教育機能や必ずしも研究者を目指さない「高度専門職業人の養成機能」への社会的期待もまた高まっております。

研究者を目指すのであれ、高度専門職業人を志すのであれ、博士課程の知的・精神的、はたまた肉体的努力と試行錯誤は、博士論文という有形の成果に帰結し、諸々の博士号が授与されます。

ところで、従来の博士の学位の意味は、明治19年の帝国大学令に「大学院は学術技術の蘊奥を攻究し」とあり、また第二次大戦後の昭和22年学校教育法65条に「大学院は学術の理論および応用を教授研究し、その深奥をきわめて」とあるように、「蘊奥」や「深奥」への、つまり「奥」への到達に対して授与されるものであった。私がここで説明しました大学院教育の目的や帰結より数等高く深いところを表現しています。このような表現が現代の社会的要請にそぐわないことは申すまでもありません。現代の博士号は、知的世界を一つ開拓した記念碑であり、同時に更なる新しい知的世界への入場資格証明書であり、「奥」ではなく、「入口」を表現しております。

自然科学関係の学位は、時代に対応して、授与されておりますが、人文・社会科学の領域では、いまだ博士号に対して学の「蘊奥」や「深奥」をきわめのセンスが日本においては残っており、仲々学位が出ないようです。「博士」という称号は、我国において養老律令以来の由緒ある恐れ多いものであるという記憶がどこかにあるのかも知れません。明治の立身出世の時代、「末は博士か大臣か」と唱われたものです。それで、事情を知らない外国人留学生が熱心に勉強して論文を書いても、学位をもらえず失望すると言ったことが多々起こりました。

たしかに、夏目漱石に文学博士号授与の話があった時、石で口をすすぐ人ですから彼は断った。断ることに社会的意味がある程に重みのある称号でした。今日では、文化勲章に当たるでしょう。先日亡くなられた大女優

の杉村春子は、かつて文化勲章の申し出をことわられました。文化勲章は、受けるのも受けないのも意味がありますが、博士学位はとることに意味はあっても、今日、ことわることに全く意味がありません。諸君、どんどん取って下さい。

ここで、博士課程入学者に対する課程博士の学位授与者数のパーセンテージを見てみますと、昭和62年（1987年）度の授与率は、人文—1.4%、社会—7.6%、教育—12.3%、理学—67.3%、工学—74.6%、農学—76.5%、保健—86.3%、平成5年（1993年）度は、人文—9.7%、社会—13.7%、教育—15.6%、理学—74.5%、工学—83.5%、農学—66.1%、保健—86.8%であります。人文・社会・教育の領域で授与率の向上はかなりですが、自然科学に比較すると、まだまだ低水準でありましょう。これを諸君の知的・精神的・肉体的努力と私たちの意識変革で適切な水準へ持って行くべきであります。

私たちは、今日、地球の有限性がもたらす無限の難問にぶち当たっており、しかも、同時に理性の有限性を悟らされております。この難問の基底には動物総重量の25%を人類が占めるといふ人類の大繁殖があります。そんな時、有限の理性を大切に育てつつ、無限に対処するしかありません。私達は、天才や超人を待望せず、自分自身の中に有限だが実のある力を開発して、平成の時代を、西暦21世紀を、イスラム暦15世紀を、仏教暦26世紀を人類社会に名誉ある地位を占める民族として、個人として、研究者として生きて行きましょう。「有限だが実のある力」の一つの証し、それが博士号なのです。

私の話に耳をかたむけてくれて、ありがとうございます。

平成9年（1997年）4月11日

科長
岩田昌征